

國學院大學學術情報リポジトリ

「暮らしの知恵」としての信仰を伝えていく：
三宅島役所跡と三宅島の神社での試み

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2025-04-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 柳原, 友子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002001568

「暮らしの知恵」としての信仰を伝えていく —三宅島役所跡と三宅島の神社での試み—

柳原 友子（壬生）

1. 「三宅島の神社」への島の内からの目・外からの目の存在

國學院大學博物館特別展「三嶋の神のモノガタリ」¹で総括されたように、三宅島は、伊豆諸島の他の島々や伊豆半島あるいはさらに遠方と繋がる信仰の形が営まれてきた場所であり、島外から多くの視線を寄せられてきた。一方で、島の人々自身が暮らしの中で祈り、「三嶋大明神縁起」に由来するものを含む、島内にある多くの神社への信仰がうかがわれる（図1）。

本稿では、三宅島に在住する筆者が、島の内から、神社を中心とした信仰の世界を捉え、地域づくりへとつなげる試みを記す。2023年2月27日に行われた、國學院大學日本文化研究所研究会にての報告「島の内からの目・外からの目」の内容を含み、三宅島の文化に関わる諸分野の専門家との、協力の在り方についても考察する。

島の祭りの中にある三嶋信仰の世界

現在でも島内の神社では、祭りに組み込まれた「神楽」において、「三島の御前」との詞をうたい続けている²。この「三宅島の神楽歌」は、三宅島内全域の人々からの信仰を集める富賀神社や、神職家に隣接する御笏神社での祭りなどで行われる。三宅島内の神々に加え、伊豆諸島の他の島々とそこに鎮座する神々の名をよむ歌も、神社での祭りに含まれる。「三嶋大明神縁起」が示す信仰の世界、すなわち遠方から伊豆諸島を望み、そこに神をみて崇めた世界が、島の信仰の中に生きていくといえる。離島という立地から、古い時代に島外より移入された民俗芸能や遺物が残存している例も特徴的であり、神仏習合の時代に形成された信仰の世界を伝える事象が、有形無形の文化財にのこる。

島の人にとっての「神さま」

一方、島内で信仰を表す行事・祭りを担い支えてきたのは、島に住む人自身であることを忘れてはならない。人々は、必ずしも神話に即した神々を想いながら祀っているわけではないだろう。主として、島における実生活の安寧を、身の回りの様々な場所で祈ってきた。個人が、自らの家族や先祖に繋がる墓所等と、並列的に祀り詣でているような「神さま」の存在がある。葬送も祭りも同じように重きをおき、似通った形で営まれ、そこへ、島外から移入された芸能などの文化的な要素を取り込みつつ、担い育んできたと考えられる。また、祈りを含む営みが現れる頻度は、時間的にも空間的にも高く、日常生活の一部としての信仰があるといえるのではないだろうか。

背景には、厳しい自然条件と、限られた社会と空間のなかで、限られた資源を利用して生きざるを得ないという、島の環境があると肯かれる事例は多い。

暮らしの中の信仰

島外から伊豆諸島の火山を崇める視点に加え、島内で暮らす人々の視点があり、雄山と呼ばれる活火山の麓で、三宅島の信仰を実質的に支えてきたのは、人々の精神的・物質的な営みであろう。島の人々が畏れ崇めてきたものの中に、島外と繋がる信仰が織り込まれ、紡がれてきたといえる。従って、島の信仰に関わる場所や行事やものについて、島に伝わる日常生活の有様と共に伝えることが肝要である。

特に1960年代以降、三宅島でも暮らしが大きく変化し、信仰は生活と乖離してきた。しかし火山活動が続いていることは、現在でも島での実際の生活と人々の心に大きな影響を及ぼしている。人口密度の低い、本州から距離のある離島という条件もまた、大きく変わることはなく、海山の自然と生活との近しさは残されている。自然災害を体感する頻度の高さから海山への畏怖が湧き、水の確保に悩まされる。人や物の出入りは、天候条件に左右される。一方、林野や海からの恵みを享受できる環境への満足感をもち、島に住んでいたいという願いがある。そこには、身の回りの自然と折り合いをつけつつ、それを上手に利用するための「暮らしの知恵」が伝わり続け、その「知恵」の一環とも思われる信仰とその形は、現代の生活の中にも垣間見られる。

島内の活動の中で、目指すもの

筆者は、2013年に島外からの移住後、三宅島で代々神職を継承してきた壬生家に嫁ぎ、2020年以降は家族と共に神職として勤めてきた。2000年の噴火災害からの復興が未だ立ち遅れている面や、島内人口の高齢化や人口減少への懸念が叫ばれる中、保全の難しさを抱える「三宅島の神社」の現状を考察しつつ、後世へ伝える策を実践してゆくべき立場にある。

壬生家が役宅としてきた由来をもち、現在でも住居と社務所の役割を果たす「三宅島役所跡」の保存活用や、文化財に指定されている神事の継承についても、当事者として関わる。さらに壬生家は、明治時代以降に神道へ改宗した100軒以上の家々の神葬祭に携わり、祖霊社の祭りも行ってきたことから、神社の祭りと葬送とが益々近しくなっている中での活動が多い。

島内の様々な場所で、聖職者以外の多くの人が肩を並べ、信仰に関わる行事に参加したり個々人で行ったりする場面に出会う。その状況が少しずつ失われつつあることを目の当たりにする中、子どもたちの世代へ伝えることを想定し、地域づくりの一環として、文化財や神社を活かしつつ保っていくことを志している。何のために信仰に関わる営みを伝えるのかと問われれば、つきつめていえば、島における個々人の暮らしがよりよくあることを目的とするのである。

自身の体験は浅いものの、神職として活動し島に暮らす中で「参与観察」的に得た情報に加え、島に暮らす人・特に島育ちの高齢者から聞き書きを行い、家族も含めた島を郷土とする人々の目線に寄り添って、島の過去・現在・未来を捉えることを試みている。合わせて、文化財や神社の在り方について、近年行ってきた試行錯誤と現場での声を、本稿にて報告する。

島の調査研究の一助として

本稿のもう一つの目的は、島外の専門家と島の人々との協力関係の在り方を提案すること

である。三宅島の信仰や民俗へ専門に関わる方々に、地域内部からの目線をもって、様々に絡み合う事象を総合的に把握しつつ、検討してほしい。また、島に潜在する資料や人材、島内のネットワークを利用し、島の人々や行政との関係を密にしつつ調査研究を行い、島というフィールドを活用していただきたい。

実際の地域では、個々の事象が互いに絡みあっており、各々の専門分野の研究者等が個別に深く探究する一方で、互いに連携し島の全体像の把握に努めることも、三宅島やより広く社会への還元、そして究極的な目標にとっては必要であると考え。島内に居住し、かつ神社の社務・行事の中で把握し得た事例を記すことで、俯瞰するような捉え方によって、島内の様々な要素をつなげて検討するための一助としたい。島の地域づくりのためには、学問や専門家の協力が求められる場面に気づかされることも多く、調査・研究の還元・活用に関する可能性や展望を、合わせて示す。

本稿に記す事例は、下記のような情報収集の方法に拠るものである。学問的な知見を示すものではなく、三宅島の信仰を中心とした文化に関する調査研究等に当たっての、手がかりを提供するものとする。尚、神社・神道に関する事象を中心に扱うが、神仏習合の痕跡も色濃く、宗派を問わない民俗的な世界観がみられるという前提から、「島の信仰」という表現を用いる。また島内では、神社や祭りに関して「神さまのこと」といって携わる高齢者に度々出会う。これにならい、神と捉えられている信仰の対象に関して「神さま」と記したい。

情報収集の方法① 島の人の目をもつ

本稿は、島の人々から、折々の行事や会話の中で得た情報を手掛かりとしている。島の中に居ながら、その古くからの暮らしに共感しつつ、「島の人の目」を根拠として世界観をとらえる試みでもある。島の「当たり前」を知る、あるいは見直すことが基盤となる。その目線は、人々の間で広く共有されているものに近くありたい。

役職者や特に詳しい方として紹介される、特定の個人からの情報だけでなく、地域内の多くの人が認識している事柄や、実際に行われていることの全容を捉えようと努めるのである。社会の中で目立つことなく日常を営んできた人々の中から、より多くの情報を得ることで、かつての島での暮らしとその精神世界の再現を試みたい。

例えば育児の時間の中で、高齢者が集まって語らう場所（図2）に偶然行きあうことや、祭りの準備や神社の掃除に集う高齢者たちの輪に加わる機会がある。このような場所で行きかう情報は、その場にいる誰とはなしに補足し合ったり肯きあったりしながら共有される。本稿では、筆者が三宅島に移住し神社へ関わるようになった2014年頃から約10年の間、そのような場で得た情報を頼りに、島で共有されていると捉えられる情報を、総合的に示す。

情報収集の方法② 人から人へと伝える機会の活用

三宅島について、神社を含んだ民俗や文化に関する調査や記録は、1960～80年代、東京都や三宅村により、文化財指定や記録のため等の公共事業として行われたものの他、「七島文庫」をのこした浅沼悦太郎氏の縁が主となって島外の民俗学者が訪れるなどの成果も多く、島内の郷土史家が記した資料もある。その中には、人々の日常の中での信仰にまつわる営みの断片が見いだせるが、徐々に変化し、取り立てて注目されないまま消失してしまいつつあるものも多く、2000年の噴火による4年間の全島避難にて島での暮らしが中断され、一見多くが

失われたかのようにもみえた。

そのような変化にあっても、古を引き継いでいる事例は根強く存在し、古の記憶を語ってくれる人やものが存在することに注目したい。単に古いものを伝えるということではなく、島の一員として、先輩たちから知恵を学び、子どもたちを中心に島の人々へ伝える。実際の営みとして伝えてゆける部分と、記録することに留まらざるを得ない部分とを整理しつつ、島の現在・将来へ活かすことを考える立場である。

情報収集の方法③ 小地域の個性を大切に伝える

三宅島内には旧5か村である5つの地区ごとの文化的な差異が大きいので、「三宅島」と一括りに論じられない面が多いことについて、既往の記録を改めて整理する必要もある。島外からの目線で、あるいは伊豆諸島の他の島々との対比から、「三宅島」全体を捉えようとすることと、島内に暮らす人との目線に齟齬が生じ、三宅島の文化に対する理解を難しくしているとも感じられる。島での暮らしの内部で当事者となってこそ、旧村各々の個性がみえるとともに、その差異を大切に伝えていく意義が見出される。

地区や集落ごとの差異が徐々に希薄となっている点や、各地区の個性に対する客観性や公平さをもって耳を傾けることが必須である点には、注意を払いたい（本稿における表記では、現在各々に自治会が組織されている旧村5地区の名称に関しては、島の人々が普段呼んでいるままに「地区」「村」を省略し、神着・伊豆・伊ヶ谷・阿古・坪田とする）。

一つの島、その内部にある地区毎、あるいはもっと細分化された地域や特定の場所に表れた、個性を大切に記録する。例えば、祠など信仰に関わる多くの場所へ、島の人々がどのように関わってきたのかを探る。これらの事例の集積によって、島内における土地と人との繋がりを再認識することを目指す。場所へのこだわりが、島の暮らしと信仰の世界を捉え、特に島の人自身が、地域アイデンティティを形成しつつ、それらを将来へ伝えていくにあたっての、拠り所となると考える。

2. 信仰の中に暮らしがのこる／暮らしの中に信仰がのこる

三宅島では、自然と暮らしと信仰との相互の近しさが残存し、信仰に関する営みは、聖職者ではない一般の人々が担う部分が多く、島の自然と社会の中での必然性から継承されてきた様相をみせる。祈りの対象は神・仏・先祖と様々で、祈っている当の人々は、いずれに重きをおくということではなく、その違いを大きく区別せず並列的に捉えている場合が多い。また、身近な植物・岩石や砂といった、常々に触れる身の回りの自然が、神社の佇まいや祭りにおいて重要な位置を占めている。信仰の素朴さと日常性は、島の自然の中で営まれる暮らしの延長であるかのようなのである。

現在は、かつての島の信仰や暮らしの世界は断片的にのこされているにすぎないが、「信仰」「暮らし」が、互いに互いの中に残存し伝わっている例は多く、両者を切り離すことなく捉えることが、三宅島の信仰の世界を知り、後世へその心と形を伝えていくにあたって必須となる。以下の事例は、①暮らしの中の信仰の名残と、②信仰の中にかつての暮らしの断片がのこる点との、両方を拾い集め記録する作業の一環である。①②を記述することで、島内での信仰の世界とその現状・課題を伝える試みである。

(1) 神社や堂宇をまつる人々

壬生家が代々祭祀を担い、島政の中心ともなってきた世襲の家柄でもあった。しかし、実際には、それ以外の島の人々も、「シャニン＝社人」「ネギ（モト）＝禰宜（元）」などの役を担い、神事を行ったり神社を管理したりしてきた³。三宅島の神楽歌では、「十三人の祝人・禰宜」の存在がうたわれる。信仰の主体となる人々が数多く存在するのである。

社人（「神主」）

「社人」は、他の職業に就きながら、行事の折々に、神職の補佐や各村の祭祀・祈祷を担ってきた。江戸時代後期には島内に8人いたが徐々に数が減り、既に絶えているが、現在も、その役割を代わる担い手が必要とされている状況である。

2000年の噴火前までは、阿古と坪田には一人ずつの社人がおり、各地区の人々からは「カンヌシ＝神主」と呼ばれることが多かったようだ。地鎮祭・地区内の祠の祭り・神事に関する相談などについては、壬生家から赴くのではなくこの神主が受けつけていた。坪田では、さらにこの神主を補佐する「カシャテ＝柏手」という役割がかつてあったことが伝わっている⁴。1940年代前半には伊豆にも1人の神主・池田氏がおり、伊ヶ谷に鎮座する后神社へも赴いていたという⁵。

世襲の場合とそうでない場合があったようで、1930年代頃から噴火による全島避難前まで、阿古の宮田氏・坪田の田村氏に加え神着の佐藤氏の合計3名が、父子で交代をしつつこの役に当たった。壬生家の神職（宮司）とともに、三宅島全島の信仰に関わる御笏神社と富賀神社、御祭神社での神事の主体となり⁶、特に太鼓と歌の神楽や、舞・歌・太鼓を含む、神事の中の民俗芸能については、これらの社人が担当していた。富賀神社の巡り神輿においても、阿古・坪田では社人が各々に先導をした。2000年以前に既に高齢であった3名の社人は、各々後継者について準備をしていたものの十分に育たないまま、東京での避難生活中に全員が逝去してしまった。

2004年の帰島後は宮司を、主としてその親族が神職資格を取得して補佐しつつ、1～2名で島内の神事や祈祷を執り行い、神輿の先導等については島外の神職に依頼することもあった。神楽については神職が代わっているが、社人が技を伝え、分担していた神事や民俗芸能の一部は、復興を待つ状態が続いている。壬生家の神職が代わる場合も多いが、担いきれない部分も生じ、祭りの様相は簡素化する傾向となってきた。特に坪田では、年間を通じて多くの祭りを「神主」が主体となり、後述の「巫女」を伴うなどして執り行っていた。その殆どが行われなくなり、一部を復興させたいとの声もある。

従来の社人に代わる者や、神事の中の民俗芸能の担い手を新たに探そうとするなど、復興に向けた動きもある。阿古と神着の社人が行っていた「月次祭」については、神職が代わることにより、近年部分的に復興を果たした。休止中となっている御笏神社・御祭神社における舞や、田植え神事などの民俗芸能は、文化財指定や研究者の後押しにより、わずかに進捗がある。東京都指定無形民俗文化財「御笏神社の神事」については、2017年頃から、映像を元に舞を再現する試みを行っており、巫女と神職とによる大祭での復興に向け、努力をしている。尚、社人は男性が担ってきたが、近年では性別を問わずに担い手を求める傾向がある。全国的に女性神職が増加し、島内でも女性である筆者が神職として活動することを受け入れる人々が多く、社人が担ってきた役割を代わることも多い。後述のように、巫女や女性たちが信仰の主体として活動する場面が多いことも、影響しているのではないかと感じられる。

巫女

主に神楽の「舞」を担う存在として「巫女」がある。神楽の巫女舞は、単調な太鼓の音に合わせて鈴を鳴らしながら回転をするという、古風を伝える形を現在も継承している。既婚女性が当たっている例も多く、1940年代以降の例では世襲でない⁷。1940年代頃まで御笏神社や二宮神社で行われていた「湯立て」では主体となり、植物の枝葉を手にして何か唱えながら集まった人々に湯をかける神事を行っていた。

1960年代頃から適任者がおらず不在となり、神楽は、社人のちには神職1名による太鼓と歌のみで奉納されていた。「御笏神社の神事」の舞のうちの巫女の役は、長い間社人が代わっていた。

1990年代に巫女を復興させる動きがあり、島外から嫁いだ女性が主として当たったが、全島避難による帰島後は再び不在となる。神楽の舞だけは近年復興し、2015年から高校生女子が3年交代で、2021年以降は、島外から嫁いだ別の女性が在任している。

巫女の姿にも変化があり、1960年代頃までの巫女は赤い千早を羽織り⁸（図3）、髪は結んでいなかったようだが、後に復興した折には、一般的な緑色の文様の入った白い千早に頭髪を結った姿となった。装束に島外からの影響が色濃くなったように、巫女舞についても現代的なものを求める声が聞かれることもある。現在では歌や細かい作法など、既に廃れてしまっていた部分があり、島特有の信仰の形の貴重さを、島内の人々に対しても示してゆくことが求められる。

禰宜（元）

「禰宜（元）」は、神事の担い手とは別に、代々自身の家に伝わる神社を管理したり祭りに参加したりしてきた。徐々に減少しているものの、現在でも役割を果たしている例が多い。複数の神社を管理する家もあるが、島内の小祠の数に近い数の禰宜元家が存在するのであり、その数は三宅島全体で20軒以上にのぼる⁹。また、仏像が安置される堂宇についても、僧侶ではないが管理をしてきた家々がある。

その家がなぜその「神さま」「仏さま」を祀る又は預かるようになったのかという経緯については様々な例があるが、三宅島の信仰の拠点である多くの神社や堂宇を、人々が分担して保ち、その祭りを担ってきたことを忘れてはならない。禰宜元が祀っている神社や祭りの規模もまた、まちまちであり、移り変わってもいる。神話「三嶋大明神縁起」に由来する祭神や仏像をもつ神社や堂宇や、延喜式内社に数えられた神社までもが、壬生家以外の多くの人々の手で守られてきた。禰宜元が存在が、島の暮らしに密接な信仰を伝える拠り所となっており、以下の事例から島の現状と課題がみえてくる¹⁰。

事例1：清掃等の管理 姉川神社・神沢神社・片菅神社

伊豆に鎮座する姉川神社と神沢神社との禰宜元の家では、毎月1日頃には掃除をするともに、榊を祠や鳥居の前に、「ハナイレ」を祠に供えてきた。「ハナイレ」（地区によっては「ハナイリ」、イントネーションも少しずつ異なる）とは、米と塩を混ぜたもの、あるいは米のみを半紙にくるんだもののことであったり、包みから米をつまんで、三か所に置くものであったりする（図4）。現在でも富賀神社に供えてあることも多く、自家の墓参の際にも用いる。対象を選ばない、お参りや祈りの際の供え物である。カラスの害などにより屋外に食物を供

えることを避ける傾向が増したことも要因して、供える人は少なくなった。「ハナイレ」という言葉自体も今の50代以下には伝わりづらくなっている中、禰宜元が、昔ながらの祈りの形を伝える存在となっている。

神沢神社の祭神は、三嶋大明神の子のひとりとされる。姉川神社についても、その祭神を神話と関連づけて記した資料があるが、神社周辺の住人によると、水を司るといいうわれや、漁師たちが詣でていたという習俗が語られる。両神社は、壬生家の娘が伊豆の家に嫁ぐ際に、神社を預けられたと伝わる。かつては、例祭も行われていた。現在は禰宜元が高齢となり途絶えつつあるが、親族などが手伝って掃除等を行っている。

神着の片菅神社では、禰宜元家の親族が、正月に掃除やしめ縄張り、榊の供えをしている。今は止まってしまった湧水の脇に自然石が祀られていて、そのために祀られたのかどうかは定かでないが、貴重な水源のひとつとともにある。島内の小さな神社のうち、石の神さまと共に祠がある例は多い。片菅神社では、祠と石との両方に榊が供えられており（図5）、禰宜元家の様々な想いが重ねられてきたのではないかと想像させられる。

祭神はやはり三嶋大明神の子とされ、延喜式内社に数えられるが、島の人々の認識・記憶の中では神話とのつながりよりも、多くの人が水汲みや洗濯のために列をなして訪れた場所なのである。三宅島には水が乏しく、ところどころにある湧水から水を汲んだり、雨水を貯めたりして使ってきた。湧水のある場所の地主が、禰宜元として神社の管理を担い続けることで、水源としての役割を失った今にも、その場所が伝わっている。禰宜元家が島外へ移住している他、少しずつ立ち入る頻度も減少しているのが現状である。

事例2：祭りへの参列

神着の大久保神社は、漁師が信仰し「浜宮様」と呼ばれる。「飯王子」「酒王子」と鳥居に掲げられており、「三嶋大明神縁起」に登場する。6月1日に大漁と海上安全を祈願する祭で掲げられる幟には「安寧子神社」「満寧子神社」と記されている。祭りは、神着の船主会（持ち船を湯船漁港にしている人々）と禰宜元が準備をし、支庁長や警察署長も参列の上、壬生家の神職が神事を行っている。

阿古の鯨神社や坪田の「高山様」でも近年、その土地や隣接の土地の工事のために木を伐採するにあたって祈祷を実施した際に、禰宜元あるいはその代理が参列した例がある。鯨神社の禰宜元では、他にもいくつかの神社を管理しており、祀られてきた場所を含め神さまを祀るということを大切に次世代へ伝えている。高齢となってきたが、島外に住む子息の来島時に、正月の飾りなどを行っているという。

事例3：「牛頭天王祭」「初午（祭）」での役割

御笏神社境内に鎮座する「牛頭天王神社」は、現在の三宅島で最も盛んに行われている祭りといってよい「牛頭天王祭」の拠り所となる。神着の禰宜元家3軒で、江戸時代から祀ってきたものと伝わる。現在はそのうち1軒がのこるのみだが、祭りでは、米や酒など供えるしきたりを持ち、神事に参列する。また、神輿渡御に随行する他、自宅の座敷に神輿を迎える儀式をするなど、祭りの中での役目を果たし続けている。

同様に現在も盛んな「初午（祭）」の拠点となる「稻荷神社」も御笏神社境内に祠が建ち、神着に禰宜元家がある。禰宜元家自身が獅子舞を出し主催していたが、担いきれず、祭りは

青年団が代わるようになった。現在は神事に参列する他、祠の櫛を用意するなどの関わりに留まっている。

禰宜元家の途絶などにより、管理しきれずに場所自体をも忘れられつつある神社も増えている。管理し続けられないと判断し、御笏神社などに合祀をしてきた例もある。小さな神社が多いことは三宅島の特色であるが、それらの大部分を一個人である禰宜元家が祀ってきたのであり、その数は減少している。島での暮らしの中で大切にされてきたその場所は、噴火などの災害を含む自然環境との関わりの上で、今後も何らかの拠り所となる可能性もあるのではないだろうか。先人の想いや、暮らしの有様を伝えるものともなり得、元の場所に保つことが望ましい。

人々による平時の信仰や、「家」の持続性が薄れていく中で、誇りや安心をもたらすものから負担へと変わっていく仕事を、誰の手でどのように担い伝えていくかが、三宅島の神社において課題となっている。ただ廃れていくものばかりではなく、変化しつつも確かにのこされている事例から、学ぶべきことを抽出してゆく作業が求められる。

（２）集落をあげての祭に伝わる、日常生活と信仰の融合—椎取神社大祭を事例として

神着に鎮座する椎取神社では、毎年一回10月11日に例祭（「大祭」と呼ぶことが多い）がある。神事については壬生家の神職が担い（2000年噴火前は社人も手伝った）、御笏神社と兼務する椎取神社役員（氏子総代）が参列するものの、準備から直会までを「島下地区」の住人が主導し、総出で行ってきた。

「地区」の役割

三宅村神着の東端に位置する「シマシタ＝島下」は、地名であると同時に、現在は「神着自治会」内を11分割した「地区」の一つである。かつては「ブラク＝部落」と呼ばれた単位で、現在でも「島下部落」と呼ぶ人もいる（他の10地区も同様である）。2年交代で「地区長」（部落長）をたて、回覧板を回すなど自治会の下部組織としての役割を果たす他、葬儀の際にも互助関係を発揮する単位である。葬儀の在り方は急速に簡素化され地区の人々の役割は薄くなってきているが、祭りに、かつての葬儀を彷彿とさせる光景がのこる。

男衆と女衆

大祭の日には、朝から草刈りや清掃を行う。主に女性たちが三方へ供えものを用意して並べ、主に男性が鳥居に竹や注連縄・幟を飾る（図6）。竹など祭りに用いる植物を採集してくる作業もある。神事が終わった後の直会は、現在では料理屋で開催するが、かつては地区内の民家にて、地区内の女性が集まって調理をし、参列者や地区の人々で会食をしていた。「オトコシュウ＝男衆」「オンナシュウ＝女衆」の呼び名は、祭りや葬儀の際などに現在もよく聞き、男女の役割が概ね分かれている状況である。

より広く、村をあげて男女が分担して祈る行事の例として、1950年代頃までみられた「雨乞い」がある。神着全体から男衆が集まって雄山へ上り火を焚いたという。これは、伊豆や坪田でも行われていた。神着の場合は、女衆が御笏神社に集まって輪になって鈴をならし何か唱え（あるいは歌い）つつ、輪になって境内をまわったという。この参加者は御笏神社近

辺の女性であったようだ。雨乞いは、実際に日照りが続いて困った年にのみ行った¹¹。

葬儀と共通する賄の風景

大祭の直会の献立や賄の風景は、葬儀の際と同様であったという。手作りの直会は、御笏神社の大祭では2017年まで行われており、いも煮や赤飯、酢味噌和えなどの郷土料理（図7）を、屋外に設置した釜を使用して共同で大量に作るという昔ながらの光景がみられた（図8）。葬儀の際に大量の調理をすることは既に廃れ、郷土料理自体も味わう機会の少なくなった頃であったが、祭りの中には、体験することができたのである。

三宅島で「イモ」といえば里芋のことで、かつては主食でもあり、広く栽培されてきた。水源が乏しいため川がなく水田耕作はできず、陸稲も明治時代以降に広まったものである¹²。現在でも自家消費のために栽培している人は多く、昔ながらの切替畑を彷彿とさせる光景が、集落からやや離れた山林にあって、島の人々は畑のことを「ヤマ」と呼ぶ。切替畑のもう一つの作物として「ササギ」と呼ばれるササゲを冠婚葬祭での赤飯に使ってきた。祭りの中に、かつての日常生活の断片が残存する事例である。

石の神さま

椎取神社の本殿は岩陰にある16柱の石の神さまと木製の祠である。石の神さまと祠の前には、「ゴクウ又はゴク＝御供」と「ゴヘイ＝御幣」を供える（図9）。この竹や葉を採取してくる作業もある。三宅島内では、石が祀ってある光景は多くみられ¹³、小祠だけでなく富賀神社でも、複数の石の神さまを祀り、祭りの日にはゴヘイを供える。特に呼び名はなく、殆どの由来が不明であり、柱数だけが伝わっている。

富賀神社には、何もない場所にも一か所、御幣を供えることになっていて、祀る対象へのこだわりが薄いという信仰の在り方が伺える。

ゴクウと、植物の地域名の伝承

ガクアジサイの葉の上に白飯をのせたものを「ゴクウ」と呼び（図10）、かつては年間を通じて、島内全域にて他の祭りでも供えられていた。現在では椎取神社大祭の他には、御笏神社大祭と神着船主会による「浜宮様」（大久保神社の例祭）でしかみられなくなっている。

自生するガクアジサイの葉を、三宅島では「シバ」と呼んできたことは、現在の日常の中では既に伝わらなくなってきたが、ゴクウの存在によって祭りの準備等の中で伝承されていくものと考えられる。白飯をよそいながら供える際には、唾がかからぬよう、境内に生えるツバキの葉を一枚とって口にくわえて行う。椎取神社本殿で供える役は、地区の男衆のうち任意の2人が担う。

神事終了後には、参列者一人一人にも配られ、御神酒とともに、直会としてその場でいただく（図11）。御笏神社でも同様に、参列者に加え、神事後の木遣り太鼓奉納や見学のために集まるより多くの人々へ配られ、「一年間元気で過ごせる」と子どもたちへ勧めるなど、伝承の機会となっている。

御幣と、竹の利用法の伝承

「御幣」は、やはり三宅島に非常に多く自生する細い竹を切って手作りする。山林から

当日又は前日頃に関係の人々が切り集めることが多い。神職が形を整え、形に切った紙垂を挟み、2本を一对として供える(図12)。かつては社人が手伝っていたが、近年では神職が1～2名で作るのを人々が手伝うこともある。

島の人々から「ニガッタケ」と呼ばれるこの竹は、メダケであり(図13)、日常生活の中で多用途に用いられてきた。いわゆる篠竹であるが島ではこの呼び名は聞かれず、「タケ」「タケノコ」といえばニガッタケを指すことも多い。モウソウチクやマダケも生育するが、比較的新しく植栽されたものであるともいわれ小規模で、食用以外にあまり用いられないことが要因と考えられる。ニガッタケとよく似た「マダケ」(ヤダケと推定される)と呼ばれる細い竹も自生しており、その苦みのない芽を食用に採取することがあるが、竹自体はニガッタケと質が違い、軟弱で加工しづらく、区別される。注連縄をかけるためのまた別の種類の竹を採取する場所やニガッタケの竹林を、人々が記憶し、暮らしや祭りに用いている。

ニガッタケの中でも、加工に適した「イチネンダケ＝一年竹(コトシダケ＝今年竹)」を見分けて使用することが多い。割いてロープ代わりに用いる・割いて竹ひごをつくり、籠や箆を編む・玩具を作るなどの為に、その年に生えた柔らかく枝分かれの少ない竹を選ぶのである。芽を食用にしたり、枝が適当に出たものを選んで箆を作ったりするなど、子どものころから日常生活の中で使う身近なものであった。籠を編んだり箆にしたりする用途には、乾燥してきた2月頃に採取するという。現在でも島で作られた竹籠や箆などを日常的に用いる人も多く、初午などの行事でもこの籠を使用することから触れる機会はあるが、竹を採取し加工する技能をもつ人はごく希少となり、廃れていくことが懸念される。

年間に何度も作る機会のある御幣には、イチネンダケを選ぶと伝わる。季節・年による質や生育の違いなどの、かつての暮らしの中で蓄積され今では廃れつつある、竹を用いるための知恵が身につき、島の植生を知ることへも繋がる。

御笏神社大祭や、富賀神社の大祭と正月、漁師たちの祭りに、御幣を供える慣習がのこる。個人が祀る神さまでは、各自で竹を切って供える例がみられ、御幣のみを神職が提供する場合もある。以前は禰宜元が祀る小祠などもっと多くの場所へ供えていたようである¹⁴。

御幣は現在でも定期的に、祀っている神の柱数だけ作るため、数多く、富賀神社や椎取神社など多くの参拝者のある場所へ供えてある。神職以外の人々が目にしたり、自ら作り供える機会がのこったりしていることを活かし、かつての暮らしや島の自然環境といった背景の再認識へつなげる余地を有する。

葬送とも共通する、榊と注連縄

どの神さまにも榊を左右に供えているが、多くの場合、マサカキではなく島に自生するヒサカキを「サカキ」と呼んで使う。三宅島の産業としてもサカキ栽培・出荷があるが、多くは自家消費のための畑に植えてあるものを利用する人が多い。「ヤマでサカキを採ってくる」のである。後述の「地主様」や禰宜元の神社にも供えられ、暮らしの中に取り込まれる頻度も高いといえる。

神道の多い神着では、共同墓地には毎月朔日には多くのサカキが供えられている。仏壇にあたる「ゴセンゾサマ＝御先祖様」の棚や、法要にあたる「ネンサイ＝年祭」、葬儀、祖霊社での盆・正月・彼岸の祭りなどでも飾られる。また、紙垂をつけて玉串として用いられる。

注連縄については、陸稲の藁や島外から取り寄せた藁を使用して手作りをしていた、とい

う思い出とともに、葬儀の際にも棺に注連縄を巻き、藁細工をしていたという記憶が語られる¹⁵。現在は注連縄自体を島外より購入して用いることが多く、葬儀では火葬への移行とともに使われなくなった。

現代の神着では特に、サカキの利用や注連縄づくりからも、葬送と神さまの祭りに似通った形がみられ、人々の神社に対する親密さが高まっているように感じられる事例に出会う¹⁶。

信仰の融合

椎取神社は、島下地区の氏神のような存在であるだけでなく、様々な側面をもつ。神着と坪田との境界付近にあるため、牛頭天王祭では神輿渡御の折り返し地点として立ち寄られ、富賀神社巡り神輿の折には坪田へ渡す拠点となる。2000年以前は椎の暗い森であり、かつては食用にする椎の実を拾いに、神着村中心部（御笏神社付近）から訪れる人もいたという。現在は2000年噴火で埋没した鳥居や枯れた椎が再生する様子などを観察できるスポットなどとして観光客も多い場所である。

一方で、延喜式内社であり、祭神は「三嶋大明神縁起」が語る神話の三嶋大明神の子のひとりとされる。大祭の神事としては、三嶋信仰を伝える内容を含む三宅島の神楽が、神職らによって奉納されてきた。

椎取神社大祭は、①身近な植物を様々に用い、②祀る対象も天然の石であるという形が、③島の人々自身が皆で担う行事として伝えられ、今にのこされている事例である。今日の日常生活では触れることの少なくなった植物を、利用するための知識や技能を伝える側面もある。その祈りは、限りある資源を有効に活用し、自然と上手に安全に関わりながら暮らそうと工夫してきた、先人の知恵の一環と捉えることができるのではないだろうか。

①～③の要素に、三嶋大明神との繋がりが合わさって、外と内の信仰の形が織りなす祭りが、島民の暮らしと融合した形で継承されているといえる。島の文化の多面的な系譜を伝え、三宅島の神社が多角的な視点を向けられつつ保たれてきたことを示すものとして重要である。

かつては島内各所の神社で営まれていた小祠の祭りが伝承でしかなくなりつつある今日¹⁷、御供・御幣・神楽が揃った祭りの形が、確かに現存する。それらが、三宅島特有のものとして育まれてきたという背景について、椎取神社大祭が体現し続けられるよう、注視することが必要とされる。現代の生活の中では、今後高まると予想される、地区住人の減少や負担感・意向などへの支援等を考えてゆくべきであろう。

現在の御笏神社や椎取神社では、移住者や異動での赴任者も取り込みながら、祭りや清掃が行われ、祭りの準備における活気、神社自体や文化財・神社の清掃への関心などもみられる。神社に関わる活動の中、その背景へ想いを馳せ、先人の暮らし・島の暮らしに共感し、その価値を積極的に捉えられる機会となってゆく可能性がある。島に住む人々への有意義な声かけに、専門家の知見を含んだ社会教育の力が発揮されるのではないだろうか。信仰というものが重くかつ日常性を帯びていたかつての価値観を再認識することが、現代における信仰の在り方への道標ともなる。

(3) 「地主様」—各戸に祀られる神

日常的に島の人々の多くが個々に神さまを祀ってきた例として、家々の庭に祀られた「ジヌシサマ＝地主様」がある（図14）。5つの地区ごとに形態の傾向が少しずつ異なるが、人々にとって最も身近な神さまといえ、神さまが多く祈りが日常にあるという島の信仰を、象徴するかのようである。

神着では民家の庭の隅に自然石を一つ置き、その両側に花瓶に挿した榊（主にヒサカキ）を供える形が多い。この自然石は、溶岩や海の丸石など様々である。坪田では小さな祠の前に鳥居を立てたものがあり、正月には御幣を供える家もある。阿古でも、庭先に石で小屋の形をつくりその前に鳥居を立てる形がみられる。また地主様と捉えられているが「神社」と名のついた祠を敷地内に据えている家も存在する¹⁸。三宅島役所跡にある壬生家の地主様は、仏の姿のような形が彫られた石である。地主様の形は、島内全域において柔軟性が高く捉えづらいが、その信仰が確かに広く存在するのである。

明治時代の移住者の家であっても、昭和40年代に建てた家にも、家を建てると同時に「地主様」を祀っている例があり¹⁹、現在でもその多くに信仰が続き、榊が飾られている様子を目にすることは多い。地主様を大切にするという信仰は、現在の60代には未だ根強く、他の様々な習俗に比べ長くのこされる可能性が高いが、今後は高齢化により失われていくことは想像に難くない。

現在新築する家に地主様を新しく祀る人はなく、敢えて次世代へ伝えないことを選ぶ例もある。旧家であっても「地主様」を畏れるあまり、既に明治時代に家を建築する際に敢えて地主様を置かなかったという例もあった²⁰。近年の事例としては、坪田の民家で数世代前に石造りの祠を地主様としてつくり、家屋がなくなっても榊を供えるなどを続けていたが、その管理も難しくなり、粗末にはしてはいけないということで、神職に依頼して地主様を祀り終える祈祷を行ったことがあげられる。

家屋を守ると考えられていることが多い様子であり、家屋の建設に付随する信仰の形であると考えられる。人々の伝承としては既に失われている可能性が高く²¹、今後の調査研究が求められる分野である。建築儀礼である地鎮祭については、比較的若い世代にも広まっていて、神職に依頼して島外と共通する祭式で行われるが、その際に地主様に関わる儀礼は含まれていないのが現状である。三宅島における建築に関わる信仰や習俗についての旧態を探ることで、地主様への祈りを再現することができる可能性があるのではないだろうか。文献等による調査など、島外からの研究者の協力が求められる点である。

(4) 盆・彼岸と「無縁」の供養 一個人や家・宗派を超えての葬送、海との関わり

島内の多くの人が一斉に祈る機会が、無縁供養という形でもみられる。「ムエン（サマ）＝無縁（様）」とは、海で亡くなった人のことだと語られることが多い。実質は海難供養と考えてよいだろう。海へ祈る・海のものを利用するといった、島をとりまく自然環境との関わり方もまた、暮らしと信仰とが織りなされてきた有様を示す。

盆に「無縁様」を迎える

盆に、自家の先祖を迎えるだけでなく「無縁様」をも迎える様々な形がある。

大久保浜にある、三宅村伊豆内の「ハシベ＝橋邊」地区では、「無縁様」と呼ばれる行事

を浜辺で行ってきた（図15）。現在は一組の家族が継承しているのみである²²。集落の前に広がる浜には砂利と小石が転がっており、毎年8月12日の夕方に、それらを並べて「お墓」をつくる。平たい石で囲んだ50cm四方程度の場所に細かい砂を敷き、海に向かった一部に「玄関」をつくる。細長い石を立て、「コウバナ＝香花」と呼ばれているシキミを飾るための花瓶を埋め、線香を立てる場所を小石で囲い、お供えをおく白く平たい石を探してきて据える。このような多少のルールに沿いつつ、囲む形や内部の装飾を自由に作ってよいという。1960年代頃には、多くの子どもたちが競うように好きな形をつくり貝殻などで飾っていたことが、大久保浜付近の出身の人々から語られる。13日の朝には香花や線香、ナスとキュウリの牛馬、食物の供え物をし、「玄関」の石の扉を開く。14・15日にも食べ物を供える。

伊ヶ谷や伊豆の一部では、お盆の仏壇やゴセンゾサマの棚にお供えをするのと同時に、庭先に無縁様への供え物を設置する。ニガツタケで棚をつくり、さらに同じ竹で簾をつくった上に団子を置き、前側の竹の柱には榊又は香花を供える（図16）。

仏壇等にもニガツタケを利用した柵をつくって、そこに里芋の茎や榊などを飾ることは、島内で広く行われてきた（図17）。

坪田では家の門の内側に細い竹（「マダケ」か）をまげた門をつくり、その場所で火を焚いて、迎えと送りをする（図18）。阿古や伊ヶ谷では、竹を切った束に火をつける例がある。無縁様のお供えや、仏壇等を竹で飾っている家は殆どなくなっているが、迎え火・送り火は今でもみられる。

海の砂の利用

盆の墓参りや墓掃除の折に海の砂を自家の墓に敷くことも、地区をまたいで行われる習俗であり、現在でも島内の多くの人々が続けている。土葬であった時代には、埋葬の際にも海の砂をとり墓に敷く作業があった。三宅島の浜辺は砂利が多く、それを「砂」と呼んでいて、墓には黒い砂利が敷き詰められている。

阿古の共同墓地は海辺にあり、かつて砂を運ぶのは子どもの仕事であったと聞く²³。堤防が建設されて運びづらくなり、今では阿古青年団が、砂を墓近くまで運ぶ役を担っている。神社の祭りや地鎮祭の際にも、海の砂を祭壇前に敷く・注連縄を立てる竹の根本に盛る・海水で祓うなど、海と関わるしきたりが伝わる。

ヤブイリに行われる行事

島内でも「ヤブイリ」と呼ばれることの多い1月及び8月の16日には、建設関係者や船・港関係者は仕事を休み、海難供養等をする会社もある。この日には海に入ってはいけないという言い伝えを今も守る人が多い他、海で亡くなった人の供養のためといって、海に団子などを撒いた思い出も語られる²⁴。港関係者では、棧橋と島内数か所の海難供養の碑などで、線香や団子を供える「舟供養」を行っている。個人の慣習にならって数十年前に会社の行事として新たに始められ、定着しているものであるという²⁵。この日の海難供養については、誰ともわからない人々に対するものと、沈没船の犠牲者や自らの家族といった、具体的な対象に対するものとが混在している。海難供養の碑は島内各所にあり、中には自然石を祀り榊を供えたものもみられる。

これらの日、坪田の海蔵寺・伊豆の善陽寺では、檀家が集まって僧侶による法要へ参列す

る。

阿古では、これらの日に親戚などの家の仏壇に線香をあげに訪れ合う「センコウタテ＝線香立て」と呼ばれる習俗がある。宗派を問わずお互いを訪ね、自家には線香を用意して訪問者が自由に出入りできるようにしておくという。神道の家では線香をあげないため代わりに榊を用意している場合もある。現在は線香立てを盛んに行う人も減少しているが、60代以上の人々は続けている²⁶。これに類似した風習として、神着の共同墓地では8月15日夕方先祖を送る際、神道の家の人々も線香を持参し、自家の墓参りの後に親戚などの墓へ線香をあげて参ることがある。葬儀の際にも宗派を問わずに相互扶助を行うなど、葬送の中にもみられる、島の暮らしに散見される神仏や宗派を問わない信仰の形の一例ではないだろうか。

神着の御笏神社内に建つ祖霊社では、ヤブイリの日に「小祭」を行う。神道の家（「社中」と呼ぶこともある）の中から当番制で選出される世話人により運営され、清掃後に供えものをし、社中が参る。上記の寺院での法要と同様、運営費用を集金する機会ともなっている。

神着ではまた、両日に女性たちが、祖霊社と観音堂など、集落内にある堂宇を巡って、歌と踊りを行う習俗もあった。1950年代には既に廃れていたが、その後もしばらく、観音堂ではこの日に御開帳を行っていたという。観音堂を守る家は神職家の分家でもあり、現在は8月15日に本家も参列の元、僧侶を招いて施餓鬼を行っている。神仏習合の名残も含む、宗派を問わない行事の系譜が、現在にもかすかにではあるが、見出すことができる。

念仏

伊豆の大久保浜ではかつて、女性たちが海に向かって線香をあげながら「ネンブツ＝念仏」をうたうことが、盆に限らず行われていた。男性たちが漁に出ている時にその無事を祈るものであり、特に決まった日や組織がないものの、「センダツ」の高齢女性らが声をかけ誘い合って地区内の女性の多くが参加していたという²⁷。漁師といっても限られた職種ではなく、人々の多くが漁に携わり、季節によって漁業・林業・農業を皆が行っていたことが背景にある。

「念仏」といわれるのは「和讃」などの節のある歌であり、浄土宗・日蓮宗どちらの寺院の檀家も、葬儀や法事の際に、主に高齢女性によって歌われるものであった。伊豆だけでなく阿古・伊ヶ谷・坪田にも共通し、盛んだった時期には、葬儀後の七日毎に、ネンブツをあげる女性たちが葬儀のあった家に赴いてうたっていた（以下ネンブツとはこの和讃等の歌を指す）。従ってその歌を聴く頻度は高く、多くの人が自然と覚えていて、葬儀の際には家族も一緒に歌うこともあったといい、誰もが参加できたのである。

現在でも、一部の地区にはネンブツがあげられる機会がある。

坪田の8月16日の海蔵寺への「お寺参り」には、新盆を迎える家族を中心とした檀家が集まり、先祖の供養に関する法要後、女性たちが「お寺節」の歌と踊りを奉納し、ネンブツをうたう。その後、坪田漁港を見下ろす「浜の宮神社」近くの高齢女性供養碑の付近へ移動し、「浜供養」を行う。女性たちが「南無阿弥陀仏」（和讃とは異なる）をうたい、甘味を食しつつ語らい、かつては菓子を海に撒いたという記憶も語られる。海蔵寺が菓子代を提供し、海で亡くなった先祖や家族をもつ人や高齢女性が参加する。これらの歌や踊りは、坪田郷土芸能保存会により継承されつつある²⁸。

阿古の「法華堂」では、ヤブイリの両日に女性たちがネンブツをうたっている。一時期途絶えていたものを、復興し少人数にて継続されている。センコウタテの一環として訪れる人

もあり、かつては会食をしていた。阿古には日蓮宗の寺院がなく、檀家の人々に管理されている堂宇である。葬儀では寺の代わりに埋葬前に参り、かつては11月に、お会式の行事もあった²⁹。

神着で葬送を中心とした機会に行われる「神教歌」は、ネンブツと共通性がうかがえる。「神教歌」の内容は、特有の節のある歌と「禊祓詞」（天津祝詞と同様の内容）からなり、神道の社中の女性たちの一部により担われてきた。かつては、前述の祖霊社の小祭で唱えられ、年2回の彼岸に行われる「祖霊社大祭」と、10月10日の「御笏神社大祭」の祭式の中でうたわれていた。神葬祭では、この女性たちが赴いて唱え・うたっていたという。歌の担い手が不在となっており、大祭や葬儀・年祭の中では、録音の音声を流している。「禊祓詞」だけは、牛頭天王祭と初午（祭）の宵宮で、青年団など他の参加者を広く取り込む形で唱えられ、その存在が再認識される機会となっている。

漁師による行事

阿古共同墓地には無縁供養碑があり、毎年春分の日、阿古船主会（阿古漁港に漁船をおく船主からなる団体）が主体となって「無縁供養」が行われる。二つの宗派の僧侶が同時に経をあげ、阿古の各々の宗派の家の女性たちが、各々に食物の供え物を持って集まり、ネンブツをうたう。ネンブツはほぼ共通しており、同時にうたわれる。かつては海に向かって拜んでいて、碑が移動した為に逆向きとなっているが、終了後には供え物を海へ流している。

阿古漁港の「浜宮様」では、海上安全や大漁を祈る例祭として、毎年2月2の寅の日に「カツオ祭り」を行う。船主会が主催し、2000年の噴火前には阿古の神主（社人の一人）が神事を担っていた。現在も御幣を供えており、かつてはゴクウを屋外の釜で焚いてお供えしたり小神楽を行ったりと³⁰、椎取神社大祭と類似の情景が見られたようだ。

現在は漁師の数も少なく移住者の割合も高く、組織的に運営されているが、かつては阿古の住民の大半が漁に携わっていたため、村をあげての行事に近いものであったと想像される。彼岸の無縁供養についても、船主が供える塔婆の数がかつては膨大だったという記憶や、子どもたちにお菓子が配られるなど、賑やかさや楽しみとしての思い出が語られる³¹。

阿古船主会は、富賀神社「西の御門」に建つ鳥居の正月飾りを担っている。正月に漁師が富賀浜や富賀神社に集まったという記録があるものの³²、人々の記憶には薄い、役割が伝わっているようだ。西の御門からは、三本岳と呼ばれる岩場の漁場がまっすぐに望める。神楽に登場する「大根原」を祀る岩々であり、神話の一場面の舞台である富賀浜沖から、富賀神社を拝む場所でもある。海の資源の利用という点で、神話と実際の島での暮らしが交わる事例である。

ネンブツや、前項の雨乞いに関しては、集団で行っているものの組織が結成されているわけではなく、自然とリーダー的な存在が現れ交代をしてゆき、その者の声かけによって自然と参加者が出てくるようなゆるい繋がりから成っていたようだ。聖職者に任せるのではなく、宗派を問わず、祭りも葬送も多くの人々によって担われている。日常の人間関係や信仰心が動機となっていたゆえに、今日の生活の中では成り立ちづらくなったと考えられるが、実生活の中・人生の中で必要とされてきた祈りの存在が、今生きている人々の中にも確かにあるということは、地域づくりと調査研究との両面において注目すべき点である。

(5) 島を巡る行事と習俗

富賀神社を拠点として、島内の他の神社へ立ち寄りながら、三宅島を一周する祭りが行われる。島外から信仰を集め、三嶋信仰の拠り所といわれる富賀神社が、島内でも確かに、島内全域と、そして島の人々と関わる信仰の形を現在に伝えている。

富賀神社の巡り神輿

富賀神社の例祭である夏の大祭では、隔年に行われる神輿渡御で、神輿が5地区に各々一晩泊り、受け渡されながら六日間かけて一周する。各地区の道中では各々に異なった芸能や飾りを含む行列をなす。獅子舞・太鼓・木遣り・お囃子など、地区ごとの芸能の個性が発揮される機会となっている。島を一周するようになったのは近代以降とされ、時計回りである³³。

御太刀様

より古くからの祭りとして、毎年1月7日の「若菜祭」がある。「御太刀様」と呼ばれる刀が入った木箱を、神職が担いで島を一周する。現在ではタクシーに乗り、都道を半時計回りで富賀神社へ参る。祭壇に刀を供えて拝礼をしたあと、坪田へ向かう。三宅高校前で車を降り、二宮神社の役員一同と合流する。御太刀様を担ぐ神職を先頭に、二宮神社まで列をなし、祭壇に刀を供えて拝礼する。拝殿内での直会の後、神社役員に見送られながら、御太刀様と神職は、御笏神社（三宅島役所跡）へタクシーで帰る。

刀を担いだ神職は、車中も含めた道中で、常に鈴を鳴らしていなければならない。密教法具と同様の五銚鈴であり、神仏習合の跡が垣間みられる。現在でも、特に坪田では、御太刀様を直接見てはならない・山側ではなく海側で拝まなくてはならないといった禁忌が伝わり³⁴、他の地区の高齢者からもかつての御太刀様の鈴の音の記憶が語られる。御太刀様が巡ってきたことを知らせる、合図としての鈴であろうことがわかる。その音によってこの祭りが、神事に携わる神職や社人だけのものではなく、人々を巻き込んだものとなっていたといえる。

コロナ感染症流行前の2020年頃までは、二宮神社で手作りの直会があり、坪田の女性が数人拝殿に集まり、手伝っていた。献立は、郷土料理のひとつである、甘い汁のうどんと決まっていたようである。

2000年噴火以前の様子が映像にのこされており³⁵、宮司ではなく神着の社人が御太刀様を担いでいた。富賀神社では社人3名が集まり、拝殿前や神輿堂の周囲での「田植え神事」も行っている。また、坪田の女性たちは賄係をするだけでなく、神前で「シュウギ＝祝儀」とよばれる歌をうたう場面も記録され、その記憶のある高齢者も健在である。めでたい席での歌で、富賀神社の巡り神輿や初午にもうたわれる機会がある。現在では継承者がごく少数であるが、保存への努力がなされている。

また、ずっと以前には徒歩で島を一周していたという。1月6日に御笏神社を出発して富賀神社に泊まり、翌朝に「田植え神事」をしてから二宮神社に立ち寄った。そのまま御笏神社を通り過ぎ、薬師堂の薬師如来像前に御太刀様を供えて泊まり、翌日の8日には「八日様」が行われたのち、壬生家に戻った。富賀神社へ立ち寄る際の行事がほぼなく、御祭神社の行事は失われた状態であるが、かつてはどちらにも人々が集まっていたという³⁶。

巡り

島を巡るという行為は、祭り以外にも個々人で、何かの節目や楽しみとして「メグリ＝巡り」と呼んで行われていた時代があった³⁷。各々が、別の地区に「ヤド」をもち、巡る日には立ち寄って休憩をさせてもらったという思い出は、各地区で語られる³⁸。七五三や卒業、出征などの節目や何かのけじめをつけたいとき、あるいは仲間での行楽として、島を反時計回りに歩いたようだ³⁹。その途中で、富賀神社に参拝するという。

現在は島にひとつの小学校で、卒業間近な6年生が反時計回りに巡る行事がある。この風景を目にして、かつての島巡りを思い出す人もおり、その習俗を伝える機会となり得るだろう。学校における、郷土理解学習や昔の暮らしの学習とつなげ、体験の中で、先人の暮らしと想いを再認識することが求められる点である。

富賀神社に毎月1日などに詣でる人も一定数あるが、信仰に関わる個々人の風習としての「巡り」は言葉の上でも、現在にはほぼのこされてこなかった。一方、神事・祭りの中で、神社と島内における人々の暮らしが交歓し、富賀神社への信仰を中心として島を巡るという行為が伝えられている。

3. 「三宅島の文化」の継承と、文化財のあり方

東京都の文化財に指定されている件数が多いことも、三宅島の特色の一つである。「富賀神社の巡り神輿」や、その中に表れる民俗芸能の一部、社人が健在の頃に担ってきた神事の中の芸能、神事に用いていた工芸品や仏像、史跡等が含まれる。文化財指定の範囲や自治体との関係などが、現状や保存の方向性へ様々な影響を与えていることに留意し、「三宅島の文化」として何を伝えていくことが重要であるのかを考えていきたい。

島の人のための文化財へ

島外から見た特異性に加え、島の人自身にとっての大切さを見失わないような方向性を鑑み、現状を再考する必要性を感じる。島の文化財とは誰のためのものであり、誰が担ってきたもので、今後は誰が支えてゆくのか、という点に立ち戻りたい。

前掲の事例から、島の日常生活の中には信仰に関する営みが多く盛り込まれ、島外からの信仰を含む文化が織り込まれてきたことがわかる。実際の祭りや神仏は、島の一般の人々が多く関わることによって保たれてきた。「島の人の目線」を伝え、これから島に育つ子どもたちや移住者の中にも育むことが、島の文化財を保存する方策であり、意義の一つでもあろう。島内での文化財の位置づけを再認識してゆくことは、島外における三宅島への信仰を含んだ文化の位置づけを、明らかにしてゆく道標ともなるのではないだろうか。

噴火災害から復興する時

島外との人やものとの交流が少ない、離島内で暮らす知恵が積み重ねられてきた時代からは刻々と遠ざかり、いうまでもなく2000年噴火以前から暮らしは変化し、忘れられつつある信仰や行事は増えてきた。全島避難が引き金となって消えかかっていた民俗文化であるが、今日、復興の兆しも随所にみえてきた。かつての記憶を直接に伝えながら後世へつなぐため、その意義と形を示す最後の機会であるとの覚悟で、検討する時である。特に、文化財へ、島

の人自身の記憶を盛り込んで伝えてゆける可能性を、最大限に活用したい。文化財等の保存へ向け、現在筆者が携わっている、試行錯誤の途上としての事例を以下にあげる。学問や行政の協力を仰ぎつつ、より有意義な方向性を目指す契機としたい。

(1)「三宅島役所」東京都史跡―暮らしと信仰とを伝える拠点へ

「(三宅)島役所跡」と呼ばれることの多い、御笏神社の一の鳥居と二の鳥居間の参道脇に建つ、壬生家の役宅であった家屋(図19)は、周囲の敷地とともに、東京都史跡に指定されている⁴⁰。東京都や三宅村での保存事業と協力し合い、壬生家の家族が居住しながら保ってきた。建物は江戸時代後期の建築であり、島のシイノキを用いた建物も数少なくなっていることから、建造物としての希少性が増している。特に、かつては島内の多くの建物が茅葺きであったが、現在の三宅島では唯一の茅葺き屋根がのこされていることが、今では特異な点である。信仰と関わり、それを背景として島政の中心となってきたからこそ、「史跡」として保たれてきた。結果的に、島の暮らしを伝えることとなった例といってもよい。

島特有の茅葺き

茅葺きの保存が難しくなる要因の一つが、数十年ごとに必要となる葺き替えである。材料の調達や、葺くための技能と人員が必要であり、経済面でも大きな負担となる。三宅島役所跡も例外ではなく、屋根の修復は最も懸念され、努力がなされてきた。

茅葺きが一般的であった頃には、島内には茅を刈り集めるための「カヤバ＝茅場」があって、人々が共同で刈り集め、屋根を葺いていた。島役所跡の屋根は、戦後一度だけ、島内に生育する茅を用い、島内の人々の手で葺き替えることが叶ったが、その後数回に渡り、島外から茅を運び、島外の茅葺職人によって葺き替えられている。

ただ、島内で「カヤ」と呼ばれてきた植物は、伊豆諸島に多く生育する「ハチジョウススキ」であり、島外がから運ぶ茅とは若干種類が異なる⁴¹。島の植生は変わらず、今も島内に多く生育しており(図20)、刈り集める作業が再現されれば、利用していくことが可能である。今後の葺き替えや修復において、島内のハチジョウススキを用いるため、実践を伴った調査研究が、筑波大学の黒田乃生教授を中心とし、(一社)日本茅葺き文化協会の専門家らの協力のもとに進められている⁴²。

また、かつての島での茅葺きには、縄を用いる代わりに、ニガッタケで作った竹ひごを使用していた⁴³。竹ひごを作り、縛るための技能や知識があったのである。

屋根の材料と葺き方において、島特有の茅葺きがあったことを再認識し、再現へ努めていくことが、「三宅島役所」保存の意義を高めるものと考えられる。

茅葺きによって伝承される、島の暮らし

茅葺き屋根の材料である「カヤ」は、島の暮らしで多様に用いられてきた。カヤは、噴火で荒れた土地や強風の海岸など、三宅島の厳しい自然条件下で生育する貴重な植物である。それを資源として上手に利用する知恵が育まれ、現在の島の暮らしの中にもその一部は、主に高齢の人々の日常生活に生きている。

茅葺きの記憶は既に殆ど語られなくなっているが、現在の70代以上の人々にはカヤを頻繁に利用していた暮らしの記憶が多い。牛の餌にし、炭を入れるための炭俵を作るなど、多用

途であった。茅葺きの為だけではなく、茅場でカヤを刈ったという。現在でも、畑の敷き藁としては、よく用いられる。第2章で述べたようなニガッタケの利用方法の一部が、茅葺きにも応用されていたといえるが、カヤの利用以上に、廃れつつある。茅葺き屋根には、祭りの場と同様に、身近な植物の利用という背景を見出すことができる。囲炉裏では炭を使うこと等も含め、三宅島役所跡には、島のかつての暮らし全般の断片が含まれるのである。

この点に着目して、2021年度より、三宅村立三宅小中学校の社会科や、総合的な学習の時間の中の郷土理解学習の授業において、三宅島役所跡の茅葺き屋根の紹介を出発点とし、島のかつての暮らしを理解するための体験学習を実施している。鎌を用いてカヤを刈る体験や、竹製の民具に触れ、使い方や作り方を知ること、島内の高齢者への昔の暮らしに関するインタビューなどである（図21）。島らしい暮らしの体験を、直接に島に育つ子どもが感じることを目的とし、三宅村教育委員会が管轄する三宅島郷土資料館に収蔵される民具類の整理と展示へ、この体験学習から得られた情報を反映させることを同時に目指している。

三宅島役所跡は、長い間の島の暮らしに典型的であった、茅葺き屋根と椎材を有する民家であるという側面と、三宅島の島内外からの視点が交わる古くからの信仰に繋がる拠点という側面とを併せ持つ。島の暮らしと信仰との両面や、それらの親密さを伝える文化財として、よりよく三宅島の文化を伝えるものとして活用されていくことが望まれる。

（2）「三宅島の歌と踊り」東京都指定無形民俗文化財—信仰という背景を見直す

島内でも各地区では、それぞれに異なった民俗芸能が伝わっており、同じ題名の曲であっても、歌い方や踊り方が少しずつ異なる。その差異は、富賀神社の巡り神輿の列や初午の獅子舞で、顕著に表れる。これらの一部が「三宅島の歌と踊り」として東京都無形民俗文化財に指定されている。

文化財指定のあゆみと郷土芸能保存会

東京都教育委員会によって1956年に行われた伊豆諸島文化財総合調査の中で、まず神着で女性を中心に行っていた歌と踊りのみが、失われつつあるものとして緊急に「都技芸（郷土芸能）」に指定された。1970年には他地区の芸能や神着の「木遣り太鼓」、「島節」などが加わり、各地区に「郷土芸能保存会」が結成される。さらに五地区の保存会による「三宅島郷土芸能保存会連合会」が設置され⁴⁴、「郷土芸能まつり」が始まるなど活発になっていく。1978年にも追加指定がなされ、現在ではこの連合会が「三宅島の歌と踊り」の代表者として指定を受けている。実際には青年団が担い手となっている芸能もある。坪田では「ヨミンチャラ」が単独で文化財となっており、歌と踊りとともに、坪田郷土芸能保存会が伝えている。

現在は「マリンスコーレ」などの島内行事のステージで公演される他、学校授業でも「郷土芸能」を総合的な学習の時間などで取り入れていて、保存会や青年団が紹介・指導をする。島外からの短期的な移住者も多く参加しているのが現状であり、三宅島で「郷土芸能」・「芸能」といえば、現在盛んに行われているいくつかが想起される。「三宅島の歌と踊り」として指定されているものの中にも、既に後継者の育成が滞ってきたものもあり、東京都の事業として、2007年度に全地区で記録撮影した映像は貴重なものとなった⁴⁵。

神着の「芸能」

神着では、「神着郷土芸能保存会」の「太鼓の部」で神着木遣り太鼓を、「踊りの部」で1957年に指定された歌と踊りを担っている。太鼓の方が概して盛んに活動が行われてきたが、1970年の文化財指定時点では、担い手が少なく、意識的に継承を行う取り組みがなされつつある時であった。太鼓の叩き方は何人かの担い手の間での個人差が大きく自由度が高かったものを、保存会として継承活動を始めると一定の形に定まり、現在に至るといふ。木遣り太鼓が行われる牛頭天王祭の継承も、保存会の活動範囲であり、祭の運営上も中核をなす。大祭や元旦祭に神社境内で奉納として太鼓を行う活動を、2000年噴火前から行っている。

神着の獅子舞は文化財指定されておらず、青年団が主体だが、保存会の太鼓の部で活動している人々が多く参加する。木遣り太鼓や獅子舞の担い手は、現在赴任による一時的な移住者の割合が多い状況である。木遣り太鼓は文化財に指定された頃から女性も加わるようになり、初午では獅子は現在も男性のみで舞うが、担い手の減少に伴って、太鼓に関して現在は女性を中心である。

信仰を伴っていた「神着の歌と踊り」

踊りの部が伝えている歌と踊り（図22）は、「神着の歌と踊り」「手踊り」と呼ばれることもあり、女性が主な担い手という点に変化はないが、文化財指定当初から様々な変遷を経ている。

第2章で述べたように、信仰に関わる堂宇にて行われる盆・正月行事として、文化財指定された。御筈神社内の「祖霊社」の徒歩圏内に、日蓮宗の堂「オソッサマ＝御始祖様」、浄土宗の「観音堂」、現在は失われている「地藏堂」があり、それらを巡りながら踊る（図23）。各々個人宅の庭先にあつて、その家の人々によって管理され祀られてきた。

盆と正月に巡る習俗は、当時の高齢者の談によるものであったが、文化財指定以降活発に歌と踊りを継承してきた人々には、この行事についての記憶が伝わっていないようである。1957年の文化財指定の際の記録では「正月と盆八月のそれぞれ16日に霊社・地藏・観音・祖師堂等を順にめぐって、島の女性たちが踊る…中世の盆風流をしのばせる」とあり、13曲が記録されている⁴⁶。曲の成立年代はまちまちで、島外から徐々に移入されたものが島内で変化したものであるとみられている。

1950年代時点でも既に廃れていた曲があり、記録された曲の中にもその後の保存会の活動の中では歌われることがなく、現在の継承者は歌もおどりもわからないものが存在する。特に、祈りに関わる2曲が現在に伝わっていないことが、信仰と芸能との乖離の一端を示すようである。「江島節」はお通夜などに念仏代わりに皆で声を合わせて歌うもの、「姉が湯節」は航海の安全を祈った船出の歌という記録がある。

神着郷土芸能保存会「踊りの部」としての活動

保存会が作られてからは、島内の「郷土芸能まつり」「産業祭」や島外のイベントでの公演などに参加していた。その機会に合わせた練習や、中学校行事で生徒が踊るための指導、録音や歌詞の記録などを行った。即興の歌詞なども含み自由に歌われていた「島節」の、様々な歌詞について蒐集記録する活動もあった。

2000年噴火より少し前からは、定期的に練習をするようになる。避難中にも都内で時々集

まって練習をしたり、イベントでの公演に出向いたり活動は続いた。避難解除の帰島後には、産業祭での公演はなくなったが、新たに神社の祭りにて踊っていた時期もある。2007年度に記録撮影された際には、そろいの着物で8名が参加している。若い世代も含め断続的に活動をしており、組織的な問題なども生じ何年か休止したものの、2023年より毎週の練習を再開した。

保存会には、発足当初から島外からの嫁や島内の他地区からの嫁も加わっていたが、踊りが好きな神着在住の女性の仲間といった様子であり、それほど大人数が参加している時期はなかったようである。現在でも島外からの移住者や他地区の人、官公庁の赴任での一時的な移住者などが自由に参加できる形態で活動している。

文化財指定より以前の失われかけていた歌と踊りは、「念仏」と同様に自然と覚えられていたものであり、自由度が高かったと思われる。太鼓とともに、保存会として活動する中で規則性が加わっていった様子がわかる。祈りの要素を含むものが続けられずに忘れられていき、信仰や暮らしといった背景が失われた状態で、「芸能」として再構築されてきた。

最近の担い手の中には、歌や踊りを行う機会や由来について問う動きがあり、現代の島の暮らしの中での位置づけや、島の文化としての意義を捉えなおそうという意欲がある。一方、専門的な知識やまとまった資料が見当たらずに戸惑っているのが現状である。自治体の支援や研究者などの専門家と繋がりつつ、再認識をすすめることが必要とされる面である。

（3）「御祭神社の神事」「御笏神社の神事」東京都指定無形民俗文化財―復興の意義を問う

御祭神社と御笏神社の祭りで行われていた舞などが、「三宅島の歌と踊り」と同年に文化財となり、対照的な推移をしてきた。

「御太刀様」の島巡りの一環として

「御祭神社の神事」は1957年、東京都文化財「郷土芸能の部」として指定され、民俗芸能としての舞の部分の希少さ、特に「王の舞」が注目されてきた⁴⁷。同時に指定された「御笏神社の神事」も、古風な舞に重点が置かれ、都内での民俗芸能大会にて、その舞だけを公演したこともある。

しかし「御祭神社の神事」とは、第2章で述べた「八日様」のことであり、この日この場所のみで完結するものではない。元来は薬師堂へ「御太刀様」を運んだ翌日、一月八日に行われる。堂に隣接する御祭神社前での神道の祭式から始まり、儀式のあと、最後に堂と神社の間の庭にて、太鼓と歌を伴った四種類の舞をおこなう。

記録映像の中には、ゴクウと御幣の他、島の植物を利用して作られた数々の供え物がみられる。また、多くの参拝者があり、御祭神社の階段下にハナイレを供えて手を合わせる高齢女性たちの姿がうつる⁴⁸。御祭神社は、富賀神社の巡り神輿でも立ち寄ることがなく、伊豆の中心的な神社と位置づけられる要素は薄いだが、かつては神着からも御祭神社へ七五三のお参りにいく習慣もあったようで、一定の人々が信仰の拠り所としていた。

文化財に指定された舞は、御太刀様が、時には人々に畏れられながら島を巡る三日間にわたる祭りの、クライマックスとしての側面があるといえるだろう。

祭りの場の意義と、「三嶋大明神縁起」へ通じる背景

薬師堂は、「三嶋大明神縁起」に記された、三嶋大明神の本地仏である薬師如来が、三宅島内では唯一納まる堂宇でもある⁴⁹（図24）。御祭神社の島内での位置づけは明らかでないものの、神事の中に含まれる「王の舞」はその神話の内容を表し、表現についても中世芸能に通じるものとされている。堂内での儀式では、伊豆諸島の島々やそこに鎮座する神々の名をよむ「御四楽」がうたわれる。

寺と神社が隣接し、現代にまでその場所における祭りが伝わってきた、神仏習合の跡でもある。また、御祭神社と薬師堂には共通の「禰宜（元）」家があり、「八日様」の儀式で用いるものや場所、直会の準備を担い、薬師堂内の儀式に参列していた。

伊豆諸島の他の島でも、薬師如来を祀る堂が神社に隣接する例があり、島内では坪田の二宮神社に、その祭神の本地仏をおく「観音堂」が拝殿の側に建つ。堂の周囲で雨乞いが行われることもあったといい⁵⁰、島の人々からの信仰もうかがえる。

「御笏神社の神事」もまた、壬生家の居宅に隣接し、集落の人々が参り集う御笏神社で行われる。舞のあとで行う「大神楽」では、伊豆諸島の島々をうたう。それらの舞や歌は、ゴクウや御幣の供え物と共に、そこに祀られた多くの神さまへ捧げられているのである。

忘れられつつある神事

しかし、保存会を設けず、主に「社人」により、祭りの一部であり、信仰を伴った行事として続けられたこれらの神事は、その技能を広める手立てを持たないまま、2000年噴火による全島避難を迎え、担い手を失って休止状態となっている。三宅小学校の郷土理解学習で用いる副読本『わたしたちの三宅島』では、改訂の度にその記載が縮小され、最新版ではついに写真が削除されてしまった。

薬師堂の禰宜元家も、現在は島外に居住し、他の多くの禰宜元と同様に、堂の管理が困難となりつつある。たとえ舞や祭りが復興されたとしても、儀式等のすべてを再現するためには、禰宜元家の役割への補助や代わる者が必要となってくる。

「御祭神社の神事」が島内の他の神社とも関わった一連の行事の一環であることを再認識しつつ、その旧態を記録していくことは、御祭神社・薬師堂の島内の人々にとっての位置づけを知ることや、「三嶋大明神縁起」の世界の体現による島外との関係を探る一助となるだろう。早期復興と文化財保存の観点から、「舞」を抽出してその担い手を募ることで消失を防ぐ策も考えられるが、「神着の歌と踊り」の例を鑑みると、信仰という背景を見失っていく懸念がある。確かに、多くの担い手や芸術性あってこそ継承されてゆくという側面もあるが、これらの神事が継承されてきた長い年月、現在よりもずっと少ない人口に支えられてきたことも、事実である。信仰を伴った文化や暮らしのあり方から、人口減少に直面している現在の私たちが学ぶことがあるのではないだろうか。社人の不在により舞や儀式が再現できないという事情にこだわらず、まずはこの日の神事としての位置づけを、復興させていく手立てを模索している。

（４）三宅島郷土資料館に保管される文化財—信仰に関する記録を

三宅島役所跡では、東京文化財ウィークの機会に毎年「文化財特別公開」を行っている。

普段は非公開である「三宅島役所」内部の公開というだけでなく、東京都有形文化財に指定された工芸品を展示する。神事で用いられていた楽面や、神社に由来する和鏡など、すべて信仰に関わるものである。かつて神社の内陣に秘蔵されていたと伝わる「三嶋大明神縁起」写本も、「三宅島の民政資料」に含まれる形で文化財となっている。

これらの多くは、管理上の目的から郷土資料館に保管されており、信仰の対象という認識が薄れている。今後も、管理や保存の問題から資料館へ移される信仰の遺物が増えることが予想される。その際、単なる工芸品として伝えられるだけでなく、背景としての信仰や島の人々の関わりについての情報を伴って収蔵されるようにするための作業が、必要となってくる。島内の行政のみでは担いきれず、研究者らとの共同作業が望まれる点である。

4. 島の「暮らしの知恵」を、様々に生かして

三宅島で暮らすためには、自然現象に対応し、相互に関わりながら利用をもしていくための知恵が、現在に至るまで不可欠であり、卑近な物質的現実的な側面での適応として技能や知識が形成されてきた。同時に、人の能力の及ばない現実を受け入れることを、祈りや占いといった、信仰の要素を含んだ精神的な営みを、日常生活の延長として行うことによって実現してきたと感じられる事例をみてきた。結果的に、様々なものへの祈りにあふれた世界を形成し、島での生活上必要とされてきたといっても過言ではない信仰の存在がある。それは、先人から受け継いできた「暮らしの知恵」に含まれるといってもよいだろう。三宅島というフィールドが、厳しい自然に対処し、限られた資源を利用する知恵の一つとして、祈ること—信仰という文化があることを、わかりやすく示してくれる。

葬送と祭り、日常生活と自然とが分離してきた現代であっても、それらが相互に関わる世界が今でも垣間見られるこの島の状況は、“信仰が自然環境と相互に関わった人の暮らしの中にある”という原点を今一度考える上で、見直されるべき時である。島全体が里山のように利用されてきた歴史の上にある知恵は、「触れないでおく」「立ち入らない」というだけの自然環境保全ではなく、関わらざるを得ない自然と人の生活との在り方を考えていく上で、現代と将来の社会と環境を考えていく道標として活かされるだろう。また、信仰を含む営みが、人々の暮らすその土地といかに繋がっているかということが、その知恵には含まれている。人の生活圏にある小さな祈りの場が忘れられたり集約されたりしていく傾向の強い中で、健全な信仰について考えていく、拠り所を提示する事例としても期待される。

地域づくりとして、島内の人材や機会の活用を

島に暮らす人自身も、薄れつつあるこの知恵を再認識したい時である。三宅島の、あるいは地区ごとの個性を含んだ知恵は、現在でも、直接島の人々の手や口によって伝えていくことが可能である。島に育つ人や住む人にとっての、ふるさとへのこだわりとなり、地域アイデンティティとなり、島や島内の小地域の文化を保存する意義となっていくと考えられる。ただ、1960年代以降大きな変化が及ぶ以前の暮らしには、近世までの物質的・精神的世界が島内に色濃くのこっていたと考えられ、それを実際に体験した人々の高齢化とともに、その情報を記録することが益々難しさを増してくることはいうまでもない。早急に取り組むべき課題であり、島の暮らしをつぶさにみていくことが必要となるこの作業の一部を、本稿によって示した。

三宅島内の教育や文化財に関わる行政の動きとしては、「三宅島郷土資料館」の展示・収蔵品整理などの事業や、小中学校における郷土理解学習の授業がある。これまで、資料館展示等を専門家に委託するなどの島の事業が行われてきたが、継続的に地域に関わってこそその情報の蓄積は、できる限り島の行政が主導することが効率的であり、島の人自身が事例の記録や伝承を積み重ねることで、地域の細かな個性を「島に生きる知恵」と認識し伝えていくことができるだろう。島の子どもたちは、高校進学と共に島外へ出ていく場合も多く、中学生までに、年々薄れていく島での昔ながらの暮らしを体験する機会が重要であると考えられる。かつての島の暮らしについての記録には、高齢の協力者を多く必要とすることから、福祉関連の機関との互助関係など、分野を超え、世代を越えた、地域づくりとしての取り組みを考えていきたいものである。

しかし、他の島々と同様に小さな自治体である三宅村では、学芸員を設置していないことや、学校の教職員の多くは数年で島外へ異動してしまうなど、島内の人材のみでは、島の文化に関する活動を十分に行うことができない現状がある。新たな課題や展望として気づかされるのは、島外との様々な連携の在り方である。伊豆諸島の他の島々や、島外の専門家・島内外の行政と、島内での記録等の活動とのつながりがより有意義にもてる形を模索したい。

伊豆諸島の島々との交流を再考して

伊豆諸島の他の島々とは、現在大人から子どもまで様々な交流がある。島内でも旧村である5地区各々の文化的差異が大きく、かつては陸上交通による往来の不便さがあった一方で、近隣の島々と海上を通じた人的物的交流がなされてきたことを耳にし、実際の共通点も見いだせる。

例えば、三宅島役所跡にのこされた茅葺き屋根は、伊豆諸島の民家がかつては一般的であったものである。移築していない住居としては唯一のこされているもので、他島の往時の暮らしを偲ぶ上でも活用が可能であろう。一方で、三宅島役所跡の保存活用に関しては、伊豆諸島特有の屋根葺きの方法や素材の採取・利用という面では、八丈島で保存されている高倉六脚が参考になり⁵¹、新島村博物館に移築展示された茅葺きの民家からは、茅葺きの継続的な保存に対する支援の在り方や公開の仕方という面で学ぶべき点が多い。神津島には、実際の屋根葺きと茅の運搬作業の記憶をもつ高齢者が複数存在する。

習俗の事例としては、伊豆諸島に特有の頭上運搬について、三宅島では早くに廃れ実際の経験者を見つけることが難しいが、神津島では現在の80代以上の多くの人々が未だ実演してくれることがあげられる。直接に伝えることや、先人の暮らしの実体験が可能となるのである。

気候や植生といった自然環境を含めた元来の類似や細かな相違、漁業や移住・婚姻での交流など、実際の暮らしの上での地区相互や他島との関係性を精査しつつ、地区ごと島ごとの個性を記録する。その情報を相互に補完しながら、暮らしの様子を伝えていくことができるのではないだろうか。

島外の諸分野の専門家と、よりよい協力関係を

これまで専門家が取り組んできた、島の神社や祭祀遺跡、「三嶋大明神縁起」の世界などに関する分析も同時に、三宅島に関わる信仰や文化の有様であり、島の人々の誇りとなり得る。成果の一部は観光や教育の現場で示されてきたが、そのような機会にも、島の人々との関連性や、本土から・伊豆諸島の他の島から・島内からといった様々な目線の存在を想定し、

公平に捉えることができるよう、さらに諸分野からの助言が求められる。島の人自身による記録や発見・伝承の活動と、研究者が取り組んできた考古や古文書の世界、そして自然科学の分野が相互に意見交換をし合うことで、信仰と暮らしとが相互に関わってきた実態も明らかになってくるだろう。その総体を示すことが、「三宅島の文化」をより有意義に伝えてゆくことではないだろうか。観光資源ともなり、島に住む人のためのものとしても、活かされていく。公平な、文化・歴史の視点が地域づくりに含まれることで、島の先人の静かな暮らしを顧み、より島に根付いた人材を育成し、近年の人口減少を憂うことへの行き詰まりからの転換を示して行けるかもしれない。

島というフィールドには、離島という限られた空間のなかで展開する自然と人との営みの相互関係がわかりやすく表れている。島外の専門家と島の人々との間に在る折々に、島自体への興味と共感・そして敬意をもち調査にあたるのが、フィールドの効果を高めるものと感じられる。三宅島が示す、土地と社会と信仰との深い関係が、なぜ人は折りつづけ踊りつづけるのか、なぜ伝承していくのか、ということに対し、如何に個々人が生きていく時にそれらを必要とするのかということを、理解させてくれる。精神世界を含めた文化を扱う学問の必要性も同時にみえてくるのである。島の内と外との共同作業で、現実の暮らし・人間の生きざまの根本に重きをおきつつ、信仰の健全さや本当に大切なものを見出していけるのではないかと考え、その環境づくりに努める考えである。

注

- 1 國學院大學博物館『國學院大學博物館 特別展 三嶋の神のモノガタリ―焼き出された伊豆の島々―』（國學院大學博物館、2023年）
- 2 「小神楽」を行っている。島々をうたう「大神楽」を行う祭りもあったが、非常に長いために休止された。歌詞は『三宅島神事芸能』等でも公開されており、現在は読みながら奉納しているが、元は口承で、微音でうたうと伝わる（神楽の稽古時、先代宮司からの情報）。
- 3 東京都教育委員会『東京都文化財調査報告書 6 伊豆諸島文化財総合調査報告 第1分冊』（東京都教育委員会、1958年）
- 4 2022年・70代男性他からの情報。
- 5 伊豆に鎮座する神沢神社祠内の棟札及び、2022年・90代男性（伊ヶ谷）からの情報。いつまで携わっていたのかは不明。
- 6 三宅村教育委員会『三宅島の神事芸能』（三宅村教育委員会、1980年）
- 7 2022年・80代女性他からの情報。
- 8 佐藤源保氏撮影（旧宅蔵）の写真による。二宮神社の巫女装束によると、古くは褐色か。
- 9 佐藤源保『写真集 三宅島の神社』（私家版、1994年）
- 10 2021年～2024年・禰宜元家に携わる本人より情報を得たもの、及び神職として行事や管理に携わる中で得た情報による。
- 11 2021年・80代女性、2023年・90代男性他からの情報。
- 12 黒潮に生きる東京・伊豆諸島編さん委員会『伊豆諸島東京移管百年記念 黒潮に生きる 東京・伊豆諸島 上巻／下巻』（東京島嶼町村会、1984年）
- 13 前掲「三宅島の神事芸能」
- 14 前掲『写真集 三宅島の神社』の図版、佐藤源保氏撮影の写真、森谷ひろみ「三宅島式内社に関する歴史地理学的研究- 2- 「三宅記」に載る「八王子」の神社について」（『千葉大学教養部研究報告A』第7号、1974年）の図版に写る。

- 15 2023年・70代男性からの情報、他複数回の聞き書きや日常の中での会話からの情報。
- 16 「うちは（お墓が）神道だから、神さまを大事にする」という語りなどを耳にする機会にも複数出会った。
- 17 坪田の社人が遺した覚書きに、かつて坪田で行われていた年間の多くの祭り毎に「ゴクシバ」「ゴヘイ」を供える場所や用意する数などが記載されている。
- 18 2023年・神職として祈祷の依頼を受けた体験より。
- 19 2023年3月・80代男性他複数回の聞き書きや日常の中での会話からの情報。
- 20 2023年3月・80代男性より聞き取り、他複数の情報から。
- 21 何を守っているのか、という質問に対する答えが不明瞭な場合が多い。
- 22 「東京七島新聞」に、毎年この行事の様子が掲載される。
- 23 2024年3月・70代女性他からの情報。
- 24 2024年8月・30代男性他からの情報。
- 25 2024年3月・60代関係者 他からの情報。
- 26 2024年1月・70代女性 他からの情報。
- 27 2024年3月・80代の地区在住者2名他からの情報。
- 28 2024年8月・坪田芸能保存会の勉強会他からの情報。
- 29 2024年4月・80代女性3名他からの情報。
- 30 2024年2月・カツオ祭りにて、70代参列者からの情報。
- 31 2022年3月・無縁供養の参列者、及び、2024年4月・80代女性複数名 他からの情報。
- 32 前掲『写真集 三宅島の神社』
- 33 東京都教育委員会『文化財の保護』第44号（東京都教育委員会、2012年）
- 34 2019年 坪田地区80代女性 他からの情報。
- 35 『1 三宅島の神事・御祭神社の神事（両国地下室・江戸東京博物館事務局より）2 御笏神社大祭（浅沼敏久氏 撮影）』（東京都教育庁三宅出張所所蔵DVD）
- 36 前掲『写真集 三宅島の神社』、高齢者複数名からの情報。
- 37 浅沼金一郎『三宅島の文化を訪ねて』（孔文堂、1969年）
- 38 2022年・80代女性他からの情報。
- 39 2022年・90代男性他からの情報。
- 40 昭和57年まで三宅村指定文化財「旧島役所」であった。三宅島史編纂委員会『三宅島史』（三宅村、1982年）
- 41 伊豆諸島植生研究グループ『伊豆諸島の種子植物とその生態—伊豆諸島の植物ガイド種子植物編—』（伊豆諸島植生研究グループ（上條隆志（代表）他）、2020年）
- 42 公益信託富士フィルム・グリーンファンド『green letter』No.44（2022年）
- 43 壬生家の先代当主他、戦後最初の葺き替えを体験した高齢者からの情報。
- 44 『三宅島郷土芸能保存会会則』（昭和48年10月発行附則令和6年1月発行）による。東京都教育庁三宅出張所所蔵
- 45 平成19年度文化財記録映画 東京都指定無形民俗文化財 三宅島の歌と踊り 前編 後編 東京都教育委員会（DVD）
- 46 『神着郷土芸能保存会 規約』他 総会議案書等 東京都教育庁三宅出張所所蔵の史料による。
- 47 橋本裕之『王の舞の民俗学的研究』（ひつじ書房、1997年）
- 48 東京都教育庁文化課『三宅島の伝統芸能』1971年度作品（東京都教育庁三宅出張所所蔵DVD）
- 49 廣瀬進吾『三宅島史考』（私家版、1987年）
- 50 2022年・70代男性からの情報。
- 51 八丈町教育委員会（株）文化財保存計画協会『東京都指定有形文化財（建造物）高倉（六脚倉）保存修理工事（移築）報告書』（2009年）



図1 三宅島内の主な神社の立地 (Googleマップ (© Google) を加工した「三宅島の神社」HP (<https://miyakejima-jinja.jimdofree.com/>) 掲載の図に加筆)



図2 高齢者が集い語り合う場 (2019年11月筆者撮影)



図3 1960年代頃の神職・社人・巫女 (佐藤源保氏のアルバムより)



図5 木造の祠と石の神さま (神着 片宮神社 2022年1月筆者撮影)



図6 権取神社大祭 (2022年10月11日筆者撮影)



図4 ハナイレ (伊豆 姉川神社 2024年3月3日筆者撮影)

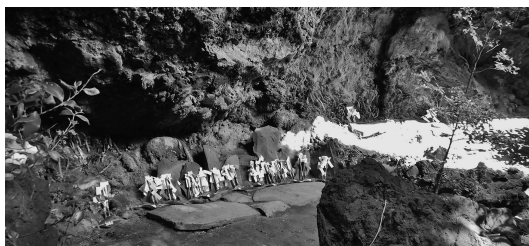


図9 石の神さまに供えられたゴクウとゴヘイ (神着 権取神社本殿 2017年10月11日筆者撮影)



図7 直会で作られた郷土料理（神着 御笏神社2017年10月10日筆者撮影）



図8 御笏神社大祭における賄の風景（神着 御笏神社2017年10月10日筆者撮影）



図10 ゴクウ（御供）（神着 御笏神社 2023年10月10日筆者撮影）



図11 儀式としての直会（神着 椎取神社 2017年10月11日筆者撮影）



図12 竹製のゴヘイ（御幣）（阿古 富賀神社 2022年9月筆者撮影）



図13 ニガッタケ（メダケ）の群落（神着 2022年12月筆者撮影）



図14 ジヌシサマ（地主様）（伊豆 個人宅 2024年3月筆者撮影）



図15 「無縁様」の準備風景
（伊豆 大久保浜 2023年8月12日筆者撮影）



図16 ムエンサマ（無縁様）
（伊ヶ谷 個人宅 2022年8月筆者撮影）



図17 ゴセンゾサマの盆飾り
（伊ヶ谷 個人宅 2022年8月筆者撮影）



図18 盆の送り迎えのための庭先の飾り
（坪田 個人宅 2022年8月筆者撮影）



図19 三宅島役所跡（神着 2022年3月筆者撮影）



図20 カヤ（ハチジョウススキ）が群生する風景（伊豆 2023年2月筆者撮影）



図21 竹製の民具を導入した郷土理解学習の授業風景（三宅村立三宅中学校 2022年9月筆者撮影）



図23 「神着の歌と踊り」が行われていた堂宇とその立地（2023年2月～2024年8月筆者撮影）



図22 神着の歌と踊り（DVD（注39）に収録された映像の一場面）



図24 かつての御祭神社の鳥居と薬師堂（佐藤源保氏のアルバムより 1980年代頃か）